人なればかばかりのこともわすれがたし、

〔看聞日記〕應永廿七年三月二日、天明之間、雪降一寸許、積落花之上、雪重積其興甚深、花時分雪降事未見及、希有事歟、一首詠之、

おもひきや花こそ雪とちるうへにかさねて雪の積べしとは

廿八年十二月十八日、夜寒嵐吹、曉雪降四五寸積、十月初雪如霜降、其後于今不降、珍敷其興不少、廊御方三位一獻申沙汰如例、其後廊局へ行、推參之間盃持參、廊御方入興及酒盛、禪啓、行光、廣時、有善等候、彼等面々續瓶申沙汰及亂舞、老尼醉狂、亂舞如例比興也、自他沈醉無極、

〔殿中申次記〕申次覺悟之事

義澄公代

一永正三年十二月卅日に、觀世大夫於庭上被成御覽時、以外大雪にて、庭上ニ雪つもり申候間、祇候仕在所の雪かきのけさせられよと、大夫申次ニ懇望申之、當日貞遠なり、返答には、御庭ニ雪つもり申事大切之儀也、又自然御馬にもめされ候事可有之、何事にかきのけ申候哉と可被仰出時、如何可申候哉、然東山殿樣○足利義政御代に、判門田御對面候時、如此大雪積候也、然ともはかせ候事は無之、以其例對大夫返答在之、尤之儀候由各被申、申次之輩可有分別事候也、

〔雲萍雜志三〕東野州佐川田喜六がもとへ、今日の御書翰に、雪のことなきは、近ごろ遺恨に候とある返事に、

眺常ならず候へども、昌俊事は、月花をのみ格別にめで侍れど、雪はさほどにうかれ不申候、人も乏しきものは寒がり、雪のふかき國にては、吹雪にしまかれなどして、こゞえ死ぬるもの多しとあれば、悅びおどるほどにはなられず候、東路の旅に、由井といへるすくに宿りし夜、はじめて雪の降ければよめる、

ながめにはあかぬ箱根のふたご山誰がこす嶺のみ雪なるらん